



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 類型性から見た有対自他動詞の研究：終止形活用語尾[-aru] 自動詞と[-eru] 他動詞を中心に                                   |
| Author(s)    | 小池, 康                                                                               |
| Citation     | 日本語・日本文化研究. 2019, 29, p. 104-123                                                    |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/73701">https://hdl.handle.net/11094/73701</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

類型性から見た有対自他動詞の研究  
 ー終止形活用語尾 [-aru] 自動詞と [-eru] 他動詞を中心にー

小池 康

# 1. はじめに

筆者は小池（2018）において、ペアとなる動詞を有する自動詞と他動詞（以下「有対自他動詞」と呼ぶ）を形式的な共通性より九つの型に分類し、いくつかの型の特徴や型間の派生過程について考察をした。本稿は、そこでは扱いきれなかった型の特徴および型間の派生過程（派生関係）について考察を加えようとするものである。

小池（2018）では、有対自他動詞を活用語尾の形式より表1のように類型化した（一部加筆）。この表は、たとえばタイプ③ [-i/-e] では「開く／開ける」[\*<sup>1</sup>]の連用形が「開きマス ak-i-masu／開けマス ak-e-masu」のように i と e の部分のみで対立していることを示している。同様に、タイプ② [-ari/-e] では「上がる／上げる」の連用形が「上がりマス ag-ari-masu／上げマス ag-e-masu」のように ari と e の部分のみが異なり、その点でのみ対

|   | 例                                        | 自動詞            | 他動詞           | 例                                      |
|---|------------------------------------------|----------------|---------------|----------------------------------------|
| ① | 合わさる、刺さる、掴まる、繋がる、はさまる                    | -ari<br>(aru)  | -i<br>(u)     | 合わす、刺す、掴む、繋ぐ、はさむ                       |
| ② | 上がる、当たる、合わさる、重なる、変わる、決まる、混ざる、見つかる、横たわる   |                | -e<br>(eru)   | 上げる、当てる、合わせる、重ねる、変える、決める、混ぜる、見つける、横たえる |
| ③ | 開く、浮かぶ、片付く、苦しむ、進む、育つ、揃う、立つ、並ぶ            | -i<br>(u)      | -e<br>(eru)   | 開ける、浮かべる、片付ける、苦しめる、進める、育てる、揃える、立てる、並べる |
| ④ | 売れる、欠ける、切れる、碎ける、知れる、取れる、ほどける、焼ける、破れる、割れる | -e<br>(eru)    | -i<br>(u)     | 売る、欠く、切る、砕く、知る、取る、ほどく、焼く、破る、割る         |
| ⑤ | 切れる、焦げる、それる、出る、溶ける、逃げる、濡れる、揺れる／増える、燃える   | -e<br>(eru)    | -asi<br>(asu) | 切らす、焦がす、そらす、出す、溶かす、逃がす、濡らす、揺らす／増やす、燃やす |
| ⑥ | 現われる、隠れる、こぼれる、壊れる、流れる、離れる、乱れる、蒸れる、よごれる   | -re<br>(reru)  | -si<br>(su)   | 現わす、隠す、こぼす、壊す、流す、離す、乱す、蒸す、よごす          |
| ⑦ | 起こる、転がる、散らかる、通る、なおる、濁る、残る、ひたる、回る、戻る、渡る   | -ri<br>(ru)    |               | 起こす、転がす、散らかす、通す、なおす、濁す、残す、ひたす、回す、戻す、渡す |
| ⑧ | 散る、飛ぶ、悩む、減る、沸く／合う、笑う／閉じる、伸びる             | -i<br>(u, iru) | -asi<br>(asu) | 散らす、飛ばす、悩ます、減らす、沸かす／合わす、笑わす／閉ざす、伸ばす    |
| ⑨ | 起きる、落ちる、降りる、滅びる                          |                | -osi<br>(osu) | 起こす、落とす、降ろす、滅ぼす                        |

表1 有対自他動詞（連用形活用語尾）の形式的タイプ

立した構造となっていることを表わしている。

表1はこのような連用形活用語尾での最小対立部分を基に類型化したものである。なお、表中の括弧内は終止形活用語尾を示している。

小池（2018）では、表1の太枠で囲まれたタイプ（③と④）の対立を軸にそれぞれのタイプの特徴について考察し、さらにこの二つのタイプが土台となって、その上下の型へと派生していった過程を想定した（図1）。

図1のような派生過程の設定は暫定的なものであり、小池（2018）では各タイプ内の考察が充分に行き届いていないきらいがある。そのような反省を踏まえ、本稿では表1におけるタイプ①～③に焦点を当てて考察する。

これらのタイプは、他動詞連用形活用語尾が *e* という点でタイプ②と③が共通し、また自動詞連用形活用語尾が *ari* という点でタイプ①と②が共通している。しかし、このような共通点が見られるとは言え、これら3つのタイプには次のような疑問点が残されている。すなわち、

- 1) タイプ③や②と比較するとタイプ①の動詞が少ないことには理由があるのか。
- 2) タイプ③と②の派生過程の想定は、タイプ①とどのような関連があるのか。

ということである。

本稿では、これらの疑問点への考察を通して、タイプ①～③の連続性と差異性について見ていく。

なお、本稿では、小池（2018）での分析で用いられた「動詞の基本形と派生形」[\*2]という概念を援用する。概略的に述べれば、派生形は基本形に辞的成分が付加して形成された語形であり、結果的に基本形よりも語形が長くなる点にポイントがある。また、このことは基本形の方が古い語形であるということも意味している（鈴木 1972、島田 1979）。このような語の史的変遷的な要素も考察の手がかりに取り入れていく。

以下、まず小池（2018）で指摘したタイプ③と②の関連性について概略を述べ、次いでこれらとタイプ①との関連性を考察する。

## 2. タイプ③と②の関連性

本節では、小池（2018）で指摘したタイプ③と②の関連性について概略する。

タイプ③は連用形活用語尾が [-i/-e] のペアであり、タイプ②は [-ari/-e] のペアである。小池（2018）では、他動詞の連用形活用語尾に *e* を共通して取るこの二つのタイプについて、下記の点を指摘している。

|   | 自動詞    | 他動詞  |
|---|--------|------|
| ② | -ari ← | -e   |
| ③ | -i →   | -e   |
| ④ | -e ←   | -i   |
| ⑤ | -e →   | -asi |

図1 タイプ②～⑤の派生の流れ

- 1) 基本形は、タイプ③は自動詞であるが、タイプ②は他動詞である。
- 2) 自動詞に **ar** が含まれていればタイプ②になり、なければ③になる。
- 3) 基本形からの派生過程として、

タイプ③自動詞 [-i] → {タイプ③他動詞=タイプ②他動詞 [-e]} → タイプ②自動詞 [-ari]

が想定できる[\*3]。

以下、これらについて説明を加えておく。

- 1) タイプ③は、連用形では自他共に同じ長さの語形になる（開きマス／開けマス、浮かびマス／浮かべマス）ため、代わりに終止形で見てみると自動詞の方が語形が短くなる（開く／開ける、浮かぶ／浮かべる）。よって、タイプ③の基本形は自動詞ということになる。

一方のタイプ②は、終止形では自他共に同じ長さの語形になる（上がる／上げる、当たる／当てる）ので、代わりに連用形で見てみると他動詞の方が短くなる（上がりマス／上げマス、当たりマス／当てマス）。よって、タイプ②の基本形は他動詞ということになる。

- 2) タイプ②の自動詞には **ar** が共通して含まれている；上がる **agaru**（上がりマス **agari-masu**）、決まる **kimaru**（決まりマス **kimari-masu**）。

**ar** は自発性を明示する接辞である（金谷 2002：215）と考えられるため、結果的にタイプ②の自動詞はタイプ③の自動詞よりも自発性がより明示的に強調されている点に違いがあると考えられる。

- 3) タイプ③と②に共通して現われる同形他動詞（例「絡める」と、それとペアになる自動詞「絡む」と「絡まる」）の派生過程を、基本形・派生形の語形的特徴を基に下記のように想定した。

タイプ③自 [-i] → {タイプ③他=タイプ②他 [-e]} → タイプ②自 [-ari]

|           |            |             |
|-----------|------------|-------------|
| 絡む（絡み-）   | 絡める（絡め-）   | 絡まる（絡まり-）   |
| すぼむ（すぼみ-） | すぼめる（すぼめ-） | すぼまる（すぼまり-） |
| 縮む（縮み-）   | 縮める（縮め-）   | 縮まる（緩まり-）   |
| 休む（休み-）   | 休める（休め-）   | 休まる（休まり-）   |
| 緩む（緩み-）   | 緩める（緩め-）   | 緩まる（緩まり-）   |

〔（ ）内は連用形〕

なお、現代語での活用の型から見た場合、タイプ②と③の双方の自動詞は五段活用動詞

であるのに対し、双方の他動詞は一段活用動詞である。よって、活用の型の違いがタイプ②と③を分けているとは見なせないことを附記しておく。

### 3. タイプ①～③の連続性と差異性

本節では、前節で述べたタイプ②③とタイプ①の関連について考察する。

#### 3.1 タイプ①の特徴～タイプ②との比較を通して～

タイプ① [-ari/-i] は、自動詞が *ari* という点でタイプ②と共通し、また基本形が他動詞である点でもタイプ②と共通している。このタイプ①に属する動詞（ペア）としては、下記のものが挙げられる。

【タイプ① [-ari/-i]（終止形 [-aru/-u]）の動詞】

合わさる／合わす、かぶさる／かぶす、くるまる／くるむ、刺さる／刺す、掴まる／掴む、繋がる／繋ぐ、はさまる／はさむ、ふさがる／ふさぐ、またがる／またぐ

このタイプに所属する動詞（ペア）の数は、タイプ②や③と比較すると極端に少なく、ほぼ上掲の語に限られるようである。

そこで、このタイプ①が、なぜタイプ②や③に比べ属する動詞の数が少ないのか、そしてそこには何か要因があるのか、という点から考察を始めてみたい。

##### 3.1.1 タイプ①の意味的な特徴からのアプローチ

タイプ①の動詞が共通して有する意味的な特徴は見出しがたい。

たとえば、タイプ①の他動詞には“他に対する主体の人為的意志的な働きかけ”といったような、他のタイプの他動詞とも共有するような意味特徴しか抽出できそうもない。あえて言えば、“主体が具体物Aに対して、別の具体物Bを用いて働きかける”とでも言えるであろうが、これにしても他のタイプに見られないわけではない；タイプ②の「温める、薄める、混ぜる」などやタイプ③の「つける（付・点）、浮かべる」など。この点で、タイプ①に共通する意味的な特徴からタイプ②③との差異を探るというアプローチは有効な手段とは言えない。

##### 3.1.2 タイプ①の形態的な特徴からのアプローチ

タイプ①が、タイプ②③と語形的に見て特異性を有するのは他動詞である。タイプ②③の他動詞が連用形 [-e]（終止形 [-eru]）を取るのに対し、タイプ①の他動詞は連用形 [-i]（終止形 [-u]）を取る。自動詞はタイプ②と共通して *ar* を有している点で、タイプ①に特徴的であるとは言えない。

## 3.1.2.1 タイプ①②連関ペア

上掲のタイプ①の動詞のうち「合わさる／合わす」[\*4]を除いた動詞は、他動詞形を基本形として、自動詞形が派生されたと考えられる（鈴木 1972）。

一方でこのタイプ①の中には、下記のように自動詞形を共有するかたちでタイプ②ともつながりを持つペア（以下、「タイプ①②連関ペア」と呼ぶ）が含まれている。

|      | 自動詞       | 他動詞 | 自動詞       | 他動詞 | 自動詞     | 他動詞 |
|------|-----------|-----|-----------|-----|---------|-----|
| タイプ① | かぶさる／かぶす  |     | くるまる／くるむ  |     | 繋がる／繋ぐ  |     |
| タイプ② | かぶさる／かぶせる |     | くるまる／くるめる |     | 繋がる／繋げる |     |

小池（2018）では、基本形・派生形の考え方より、タイプ②の派生過程を {他動詞 [-e] → 自動詞 [-ari]} という方向性で位置づけた（図1 参照）が、タイプ①②連関ペアの場合、むしろ図2のように、タイプ①他動詞を基とする二つの方向性を設定したほうが合理性があると思われる。（もしくは、{タイプ①他 [-i]（終止形 [-u]）→タイプ②他 [-e]（終止形 [-eru]）→タイプ①②自 [-ari]（終止形 [-aru]）} という一方向の流れも想定できるが、これについては 3.2.3 で述べる。）。

|      | 自動詞                 | 他動詞           |
|------|---------------------|---------------|
| タイプ① | かぶさる<br>くるまる<br>繋がる | かぶす、くるむ、繋ぐ    |
| タイプ② |                     | かぶせる、くるめる、繋げる |

図2 タイプ①②連関ペアにおけるの派生の流れ

このように見た場合、タイプ①②連関ペアでは、タイプ①の他動詞が基本形になっていると言えそうである。そして、この過程を動詞の変遷史（加藤 1972、坪井 2007）と照らし合わせてみると、もともと古形では四段活用であったタイプ①他動詞（終止形 [-u]）が下二段活用へと変化（もしくは四段活用と下二段活用が併存）し、その下二段活用が下一段化したことによりタイプ②の他動詞（終止形 [-eru]）が生じたと考えられる。その一方で、タイプ①と②の他動詞に対応する自動詞として「かぶさる、くるまる、繋がる」などの終止形 [-aru] が形成されたと考えられるのである [\*5]。

この過程は図3のように図示できる（便宜上、終止形で表示する）。

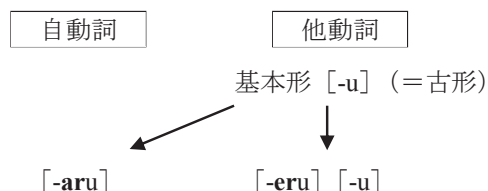


図3 タイプ①②連関ペアの派生過程（仮説）

### 3.1.2.2 タイプ①のみに属すペア

ここで、タイプ①にのみ属すペアについて見ておく。ここには、タイプ①②連関ペアおよび「合わさる／合わす」を除いた以下のペアが該当する。

刺さる／刺す、掴まる／掴む、はさまる／はさむ、ふさがる／ふさぐ、  
またがる／またぐ

これらのペアの他動詞は終止形 [-eru] (=タイプ②) にすることはできるが、その意味が<可能>に特化されてしまう点でタイプ①②連関ペアとは異なる。

タイプ①のみのペアの他動詞終止形 [-eru]

刺す→刺せる、掴む→掴める、はさむ→はさめる、またぐ→またげる ……<可能>

タイプ①②連関ペアの他動詞終止形 [-eru] (=タイプ②他)

かぶす→かぶせる、くるむ→くるめる、繫ぐ→繫げる ……<非「可能」>

さて、タイプ①のみのペアも形態的な側面より考えれば語形の短い他動詞形が基本形であり、そこから自動詞形が派生されたと考えられる。語史的に見ても、他動詞形が自動詞形よりも時代的に後出することはないようである<sup>〔\*6〕</sup>。

ただ、なぜタイプ①のみのペアはタイプ①②連関ペアのような変化をせずに、他動詞 [-eru] が<可能>の意味に特化してしまったのかについては疑問は残る。「刺さる／刺す」や「掴まる／掴む」については、他動詞形は平安期頃には既に存在していたが、自動詞形は室町期や江戸期から使われ出した動詞であるとの指摘があることから、形成された時期が比較的新しい動詞は特異な意味・用法になってしまうようにも見えそうではあるが、他のペアについてはこのような出現時期の違いは見られないようである<sup>〔\*7〕</sup>。この点については結論を保留しておきたい<sup>〔\*8〕</sup>。

また、その一方で、「かぶす・かぶせる」や「繫ぐ・繫げる」といったタイプ①②連関ペアの二つの他動詞は、[-eru] を含む形式が<可能>の意味に特化されているわけでもなく、[-eru] を含む形式と含まない形式がほぼ類義の関係で併存している。この現象は「言語の経済性」という観点からすると不経済であるとも見られることから、今後これらの語はどちらか一方が淘汰される可能性も想定できる<sup>〔\*9〕</sup>。

### 3.1.2.3 動詞の古形から見た特徴

次にタイプ①と②を当該動詞の古形から考えてみる。なお、ここでは後の議論の便宜上、適宜タイプ③も含めて論を進める。

動詞の古形からタイプ①～③を見てみると、以下のような特徴的な分布を見せる。

タイプ①(タイプ①②連関ペアも含む)の古形=現行の他動詞と同形である

(例) かぶす、刺す、掴む、はさむ、ふさぐ

タイプ②の古形=現行の自動詞もしくは他動詞と同形ではない

(例) 変ふ、決む、下ぐ、曲ぐ、終ふ

タイプ③の古形=現行の自動詞と同形である

(例) 開く、苦しむ、沈む、届く、休む

タイプ① [-ari/-i] (終止形 [-aru/-u]) の動詞—かぶさる／かぶす、刺さる／刺す、掴まる／掴む、繋がる／繋ぐ、など—は、いずれも古形は現行の他動詞形と同形である。

逆にタイプ③ [-i/-e] (終止形 [-u/-eru]) の動詞は、いずれも古形は現行の自動詞形と同形である；開く／開ける、届く／届ける、並ぶ／並べる、縮む／縮まる、など(ただし、現行の自動詞形は、古語においては下二段活用他動詞としても用いられていた。)

では、タイプ②はどのような特徴があるのだろうか。

まず、タイプ②に属すペアのうちで、タイプ①や③と共用される(連関する)動詞がないもの、すなわち「タイプ②専属ペア」を以下に掲げる。このリストでは、タイプ②

[-ari/-e] (終止形 [-aru/-eru]) のペアの後に、その古形を< >に入れて太字で示した。なお、表示の煩雑さを考慮し、すべてひらがなで表示した。

#### 【タイプ② [-ari/-e] (終止形 [-aru/-eru]) の動詞】

あがる／あげる<あぐ>、あたたまる／あたためる<あたたむ>、あたる／あてる<あつ>、あつまる／あつめる<あつむ>、あらたまる／あらためる<あらたむ>、うかる／うける<うく>、うすまる／うすめる<うすむ>、うまる／うめる<うむ>、うずまる／うずめる<うづむ>、うわる／うえる<うう>、おさまる／おさめる<をさむ>、おわる／おえる<をふ>、かかる／かける<かく>、かさなる／かさねる<かさぬ>、かたまる／かためる<かたむ>、かわる／かえる<かふ>、きまる／きめる<きむ>、きよまる／きよめる<きよむ>、きわまる／きわめる<きはむ>、くわる／くわえる<くはふ>、さがる／さげる<さぐ>、さだまる／さだめる<さだむ>、しずまる／しずめる<しづむ>、しまる／しめる<しむ>、すわる／すえる<すう>、せばまる／せばめる<せばむ>、せまる／せめる<せむ>、そなわる／そなえる<そなふ>、そまる／そめる<そむ>、たかまる／たかめる<たかむ>、たすかる／たすける<たすく>、たまる／ためる<たむ>、つかる／つける<つく>、つたわる／つたえる<つたふ>、つづまる／つづめる<つづむ>、つとまる／つとめる<つとむ>、つまる／つめる<つむ>、つよまる／つよめる<つよむ>、つらなる／つらねる<つらぬ>、とおさかる／とおさける<とほざく>、とどまる／とどめる<とどむ>、とまる／とめる<とむ>、はじまる／はじめる<はじむ>、はまる／は

める<はむ>、はやまる／はやめる<はやむ>、ひろがる／ひろげる<ひろぐ>、  
ひろまる／ひろめる<ひろむ>、ふかまる／ふかめる<ふかむ>、へだたる／へだて  
る<へだつ>、まがる／まげる<まぐ>、まざる／まぜる<まざる>、まじわる／まじ  
える<まじふ>、まとまる／まとめる<まとむ>、まるまる／まるめる<まるむ>、  
みつかる／みつける<みつく>、もうかる／もうける<もうく>、ゆだる／ゆでる  
<ゆづ>、よこたわる／よこたえる<よこたふ>、よわまる／よわめる<よわむ>

以下のリストもタイプ②に属すペアであるが、その古形は【 】で示されたタイプに属しているものである。たとえば、「かぶさる／かぶせる」はタイプ②であるが、その古形「かぶす」はタイプ①に「かぶさる／かぶす」として現われる語であるということを示している。つまり、【タイプ①】と表示されているペアは、タイプ①②連関ペアに該当する動詞ということである。

また、「古形のない動詞」は、明治期以降に用例の初出が確認されるペア<sup>〔\*10〕</sup>で、直接の古形は存在しないと考えられるペアである。

【タイプ①】 かぶさる／かぶせる<かぶす>、くるまる／くるめる<くるむ>、  
つながる／つなげる<つなぐ>

【タイプ③】 からまる／からめる<からむ>、すぼまる／すぼめる<すぼむ>、  
ちぢまる／ちぢめる<ちぢむ>、やすまる／やすめる<やすむ>、  
ゆるまる／ゆるめる<ゆるむ>

【タイプ⑧】 あわさる／あわせる<あう>

【古形のない動詞】 のっかる／のつける、ぶつかる／ぶつける

これを見ると、タイプ②専属ペアには、現行の語形とは異なる古形が存在していたことがわかる。その一方で、タイプ①や③と連関関係を持つタイプ②ペアの古形は、現行と同じ語形のものがタイプ②以外に残っていることがわかる。

これらの古形は下二段活用他動詞（例「あぐ」）であり、それらが下一段化することによって er を共通して含む他動詞形（「あげる」）ができ、それに応ずる形で ar を含む自動詞形（「あがる」）が形成されていったと考えられる<sup>〔\*11〕</sup>。

このように見た場合、タイプ②を他動詞 [-e] から自動詞 [-ari] の方向（終止形では [-eru] から [-aru] へ）の派生と想定した（図1参照）ことについて再考を要することになる。なぜならば、タイプ②の動詞ペアには、現代では使われていない当該動詞の古形—連用形 [-i]・終止形 [-u] の語形—が背景化されて存在していると考えられるからである。これを「決まる／決める」を例に図示すると、図4のようになる（背景化された部分は点線で示す）。

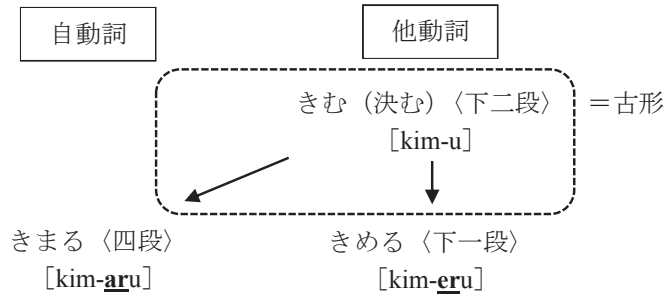


図4 タイプ②の派生過程例(仮説)

そして、この過程における他動詞形 [-u→-eru] の派生および自動詞形 [-u→-aru] の派生は、タイプ①②連関ペアにおける派生過程と軌を一にしていることがわかる(図3参照)。異なっているのは、タイプ①②連関ペアは他動詞形が現代語と古語とで同形であり、かつ現代でも使用されている形式であるのに対し、タイプ②専属ペアは他動詞が古語と現代語で異なっており、古形が現在では使用されずに、その存在が背景化されてしまっている点にあると言える。

以上のことから、タイプ①と②の異同は、次のようにまとめられるであろう。

タイプ①の他動詞形は古形と同じ形態であり、それを基本形として自動詞形が派生されたと考えられるのに対して、タイプ②は現行の他動詞形とは異なる他動詞古形があり、それを基本形として現行の他動詞および自動詞を派生させたと考えられる。

つまり、タイプ①と②は、他動詞古形 [-u] をベースに他動詞 [-eru] と自動詞 [-aru] を派生させた点は共通するが、タイプ①は他動詞古形 [-u] がそのままの形で現在でも使われているのに対して、タイプ②は他動詞古形 [-u] は背景化されてしまい、他動詞派生形 [-eru] の方のみが現在使われている点で異なっているのである。

### 3.2 タイプ②の特徴～タイプ③との比較を通して～

#### 3.2.1 古形による分類から見たタイプ②の特殊性

先の3.1.2.3では、タイプ①と②を動詞の古形に基づくアプローチで比較した。本節では、同じく古形の観点より、タイプ②の特殊性について見ていくことにする。

3.1.2.3での考察をタイプ②に主眼を置いてまとめると、以下のようになる。

- a. タイプ②には、タイプ①他動詞を基本形として、タイプ②の自動詞と他動詞を派生させたものが含まれている。その場合、タイプ②自動詞は、タイプ①自動詞と同形である。(「タイプ①②連関ペア」)

；くるまる／くるめる (①他くるむ)、つながる／つなげる (①他つなぐ)、など

- b. タイプ②には、他動詞の古形を基本形として、現行の自動詞形と他動詞形を派生

させたものが含まれている。（「タイプ②専属ペア」）

；決まる／決める、曲がる／曲げる、連なる／連ねる、など

a はタイプ①との関連で特徴付けられ、b はタイプ②独自の特徴と言えるであろう。  
では、タイプ③との関係からどのような特徴を見出すことができるであろうか。

### 3.2.1.1 タイプ②③連関ペア

タイプ③<sup>〔\*12〕</sup> は連用形活用語尾 [-i/-e]（終止形活用語尾 [-u/-eru]）を取る自他動詞のペア—開く／開ける、傾く／傾ける、沈む／沈める、など—であるが、ここに属するペアの中でタイプ②と③の双方に関わる動詞（以下「タイプ②③連関ペア」と呼ぶ）には以下のものがある。

#### 【タイプ②③連関ペア】

からまる・からむ／からめる、すぼまる・すぼむ／すぼめる、縮まる・縮む／縮める、休まる・休む／休める、緩まる・緩む／緩める

これらは、他動詞形が共通で、自動詞形が異なるペアである。これはタイプ①②連関ペアが、自動詞形が共通で、他動詞形が異なっていた点と対照的である。

|   | 自動詞  | 他動詞   | 自動詞 | 他動詞  | 自動詞 | 他動詞  |
|---|------|-------|-----|------|-----|------|
| ② | からまる | ／からめる | 縮まる | ／縮める | 休まる | ／休める |
| ③ | からむ  | ／からめる | 縮む  | ／縮める | 休む  | ／休める |

タイプ②③連関ペアの古形は、いずれも現行のタイプ③自動詞形と同形である（『日本国語大辞典』参照）。ただし、古語においては現行の自動詞形が他動詞としても用いられていた「自他同形動詞」（自動詞は四段活用で、他動詞は下二段活用で使われていた<sup>〔\*13〕</sup>）であったと考えられることから、自他同形を基本形として自動詞形と他動詞形に分岐していったものと考えられる（図5参照。点線で囲った部分は背景化されていることを示す）。

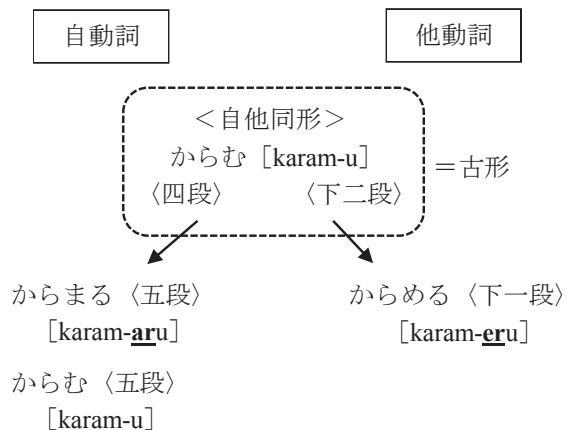


図5 タイプ③の派生過程（仮説）

ここでタイプ①②連関ペアとタイプ②③連関ペアを表2のように表示すると、両連関ペア間で対照的な動詞の配置になっていることがわかる。(色付きマスは基本形を示す)

|   | 自動詞           | 他動詞           |
|---|---------------|---------------|
| ① | かぶさる、くるまる、繋がる | かぶす、くるむ、繋ぐ    |
| ② |               | かぶせる、くるめる、繋げる |
| ② | からまる、縮まる、休まる  | からめる、縮める、休める  |
| ③ | からむ、縮む、休む     |               |

表2 ①②連関ペアと②③連関ペアの分布

まず、タイプ①②連関ペアとタイプ②③連関ペアの特徴を古形との関連で見ると、基本形が他動詞であった①②連関ペアに比べ、②③連関ペアは基本形が自他両用であった点で②③連関ペアは相対的に他動詞的な意味の度合いが弱かったと見られる。そしてこのことは、基本形が同じ終止形 [-u] の形になる動詞でも、①②連関ペアの基本形であるタイプ①他動詞(かぶす、くるむ、など)は<他への働きかけ>の意味を持つのに対し、②③連関ペアの基本形であるタイプ③自動詞(縮む、休む、など)は<他への働きかけ>の意味はなく、<自発的な動作・作用>を表わすことに繋がっていると考えられる。

### 3.2.2 タイプ②の三つの下位類

以上の考察より、タイプ②に属すペアの特徴をまとめると以下のようになる。

タイプ②は、自動詞連用形 [-ari] / 他動詞連用形 [-e] (終止形 [-aru] / [-eru]) で、基本形は他動詞となる点では共通する。そして、基本形は終止形 [-u] (古形も含む) から自動詞 [-aru] と他動詞 [-eru] が派生した点でも共通していると言える。

一方で、タイプ②には大きく以下の三つの下位類が認められる。表3に即して説明を加えておこう。なお、表3は自・他動詞の活用語尾は連用形表示にし、括弧内に終止形を表示した。また、表中の(a)~(c)は、下記の三つの下位類に該当する箇所を示す。色付きのマスは、古形と同形の現行の動詞であり、かつ基本形にもなっていることを表わしている。

- a. タイプ①他動詞を基本形として、タイプ②の自動詞と他動詞を派生させたもの。タイプ②自動詞は、タイプ①自動詞と同形である。(**「タイプ①②連関ペア」**)

<表の実線太枠で囲まれた部分>

; かぶさる／かぶせる (①他かぶす)、 つながる／つなげる (①他つなぐ) ...

- b. 古形(他動詞)を基本形として<sup>[\*14]</sup>、現行の自動詞形と他動詞形を派生させた

|   | 自動詞                                                                        | 他動詞                                                        | 古形                                                       |
|---|----------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|
| ① | 掴まる、はさまる、ふさがる                                                              | 掴む、はさむ、ふさぐ                                                 | -i<br>(-u)<br>つかむ、はさむ、ふさぐ                                |
| ② | -ari<br>(-aru)<br>(a) かぶさる、くるまる、繫がる<br>(b) 決まる、備わる、広がる<br>(c) からまる、縮まる、休まる | かぶす、くるむ、繫ぐ<br>かぶせる、くるめる、繫げる<br>決める、備える、広げる<br>からめる、縮める、休める | -e<br>(-eru)<br>かぶす、くるむ、つなぐ<br>きむ、そなふ、ひろぐ<br>からむ、ちぢむ、やすむ |
| ③ | -i<br>(-u)<br>からむ、縮む、休む<br>開く、沈む、届く                                        | 開ける、沈める、届ける                                                | あく、しづむ、とどく                                               |

表3 タイプ②の三類型とタイプ①③との関連

もの。「タイプ②専属ペア」

；きまる／きめる（きむ）、しまる／しめる（しむ）、まがる／まげる（まぐ）...

- c. 古形の自他同形動詞を基本形として、タイプ②の自動詞と他動詞を派生させたもの。自他同形動詞自体はタイプ③の自動詞として残り、タイプ③他動詞はタイプ②他動詞と同形である。「タイプ②③連関ペア」＜表の破線太枠で囲まれた部分＞  
；ちぢまる（③自ちぢむ）／ちぢめる、すぼまる（③自すぼむ）／すぼめる...

表3より、タイプ②は現行では自動詞連用形 [-ari] / 他動詞連用形 [-e]（終止形 [-aru] / [-eru]）として共通した語形を持っているが、そもそもは三つの異なる出自を持つ動詞群から成り立っていることがわかる。現行では用いられない語形を古形として持つ語群(b)と現行でも用いられる語形を古形として持つ語群(a)と(c)に分かれ、(a)においてはタイプ①と、(c)においてはタイプ③とのつながりが認められる。なお、(a)～(c)の古形は、いずれも終止形 [-u] であるという共通点を持つ。

一方で、小池（2018）では、自動詞形に比べ他動詞形が短い（「決まりマス／決めマス」）ことから、タイプ②の基本形を他動詞と見なしたが、今回の考察より、古形の存在が背景化されている場合（タイプ②b）と古形が他のタイプ他動詞形もしくは自動詞形として残っている場合（タイプ②a,c）があることもわかった。ただし、これらの古形は、他動詞としての用法を持っていること、および現行においても「決まりマス／決めマス」のように他動詞形の方が短いことなどから、タイプ②（特にタイプ②b）の基本形を他動詞と見なすことについては修正の必要はないと考える。

## 3.2.3 活用語尾 [-u] [-eru] [-aru] の関係性

タイプ②bについて、特に終止形の活用語尾に焦点を当ててみると、古形 [-u] から自動詞 [-aru] / 他動詞 [-eru] へと変化していることがわかる。

|     | 〈古形・下二・他〉 | 〈下一・他〉  | 〈五段・自〉  |
|-----|-----------|---------|---------|
|     | 決む、曲ぐ     | 決める、曲げる | 決まる、曲がる |
| 終止形 | [-u]      | [-eru]  | [-aru]  |
| 連用形 | [-e]      | [-e]    | [-ari]  |

そして、他動詞の連用形活用語尾は [-e] と古形の連用形活用語尾と同形を維持しているのに対し、自動詞の連用形活用語尾は [-ari] と長くなっていることから、[-ari] は派生した語形である可能性は高いと言える。とは言え、[-aru] が必ず [-eru] を経てから生起したと言えるかどうかについては筆者の力に余るところでもあるので、ひとまずは図6のような派生過程として考察を進めることにする。

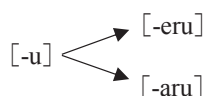


図6 タイプ②(b)の派生過程(仮説)

## 3.2.3.1 接辞 er

終止形活用語尾 [-u] → [-eru] の派生過程において、ポイントとなるのは接辞 er の付加と言えるであろう。この er は、下二段活用から下一段活用への変化に伴い、その終止形・連体形・已然形に新たに現われたものである。

坪井(2007: 26-30)に準じる[\*15]と、下二段終止形は活用語尾が [-u] であり、それは未然形や連用形の活用語尾である [-e] と対立するものであった。しかし、終止形・連体形の合一により下二段の終止形は [-uru] になったのだが、これは活用語尾 [-u] に別の辞 ru (もしくは ur) が添加されてできたものであり、添加された分、u それ自体の重み

|        | 未然   | 連用 | 終止         | 連体  | 已然  | 命令  |
|--------|------|----|------------|-----|-----|-----|
| 下二段    | e    | e  | u<br>→ uru | uru | ure | eyo |
| 下一段    | e    | e  | eru        | eru | ere | eyo |
| 四段(五段) | a(o) | i  | u          | u   | e   | e   |

表4 下二段・下一段・四段(五段)の活用

は相対的に弱くなった。逆に、**e** は未然形や連用形の活用語尾を表わす辞として単独でそのまま使い続けられたことから、下二段活用としてのアイデンティティーは **e** が担うこととなった。そして、一段化の変化において、この **e** がすべての活用形における形態的な差性を持つようになり、下一段活用になったと考えられる。

このように考えた場合、終止形 [-u] を持つ動詞が日本語動詞においては原初的な位置を占めていると考えられ、[-eru] などの活用語尾はそれからの派生形態と考えられる [\*16]。

では、接辞 **er** 自体が持つ機能とは、どのようなものなのであろうか。

**er** は、他動詞ではタイプ②と③に、自動詞ではタイプ④と⑤に現われる接辞である（表 1 も参照）。このように、同一の形態 **er** が他動詞にも自動詞にも現われるという点は、後述する **ar** が自動詞にのみ出現する接辞である点と対照的である。

タイプ② [-aru/-eru] 上がる／上げる、当たる／当てる、決まる／決める...

タイプ③ [-u/-eru] 開く／開ける、育つ／育てる、並ぶ／並べる...

タイプ④ [-eru/-u] 売れる／売る、切れる／切る、割れる／割る...

タイプ⑤ [-eru/-asu] 溶ける／溶かす、逃げる／逃がす、増える／増やす...

このうち、タイプ③は自動詞 [-u] / 他動詞 [-eru] になっているのに対し、タイプ④では自動詞 [-eru] / 他動詞が [-u] と、タイプ間で対照的な位置づけになっている（下線部参照）。このことから、**er** は自動詞を他動詞に、または他動詞を自動詞に変換する接辞であるという解釈が成り立つ。

小池（2018）では、自動詞を＜自発的自己完結的な変化＞、すなわち“主体の意志の有無にかかわらず、動作・行為による進行・変化を表わす”と規定した。また、他動詞は＜働きかけによる変化＞、すなわち“主体が意志的に対象に働きかけることにより、対象（の状態）を変化させる動作・行為を表わす”と規定した。

このことを踏まえると、**u** 自動詞に **er** が付加するということは、自動詞の意味を他動詞の持つ＜働きかけによる変化＞の意味に変換させるということであり、**u** 他動詞に **er** が付加するということは他動詞の意味を自動詞の持つ＜自発的自己完結的な変化＞という意味に変換させるということになる [\*17]。

このように、接辞 **er** は、基本形 [-u] の動詞に付加されることにより、自他の点において基本形と対立する意味に変換される—すなわち自動詞が基本形ならば他動詞的な意味に変換され、他動詞が基本形ならば自動詞的な意味に変換される—と考えられるのである

[\*18]。

### 3.2.3.2 接辞 **ar** の存在理由

[-u] と [-eru] が、自動詞／他動詞のペア（タイプ③）にもなる一方で他動詞／自動詞

のペア(タイプ④)にもなるのに対し、[-aru]は自動詞の活用語尾としてしか出現しない(タイプ①と②、下掲の例を参照のこと)。その点で、arは自動詞を作る接辞として特徴付けられる(奥津1967<sup>〔\*19〕</sup>、島田1979、影山1996<sup>〔\*20〕</sup>)。

タイプ①の例　くるまる、刺さる、はさまる、またがる、など

タイプ②の例　(a)かぶさる、繋がる、(b)決まる、弱まる、(c)休まる、緩まる、など  
(タイプ②のa-cは、3.2.2での分類を示す)

さて、先にuにerを付加することにより他動詞を自動詞にする、もしくは自動詞を他動詞にすると述べた。すると、自動詞形は[-u]か[-eru]かがあれば足りるはずであるのに、自動詞を作る接辞としてarが存在する理由はどこに求められるのであろうか。

そこで、erとarを差異を明らかにするために、自動詞[-eru]／他動詞[-u]を取るタイプ④と自動詞[-aru]／他動詞[-u]を取るタイプ①を比較してみる。

タイプ④の基本形(他動詞)は、下掲のように、対象に対する「破壊性」という側面も含んだ形での＜表面的な変形性＞(小池2018)を意味特徴に持つ動詞群である<sup>〔\*21〕</sup>。

折れる／折る、欠ける／欠く、切れる／切る、裂ける／裂く、炊ける／炊く、取れる／取る、抜ける／抜く、脱げる／脱ぐ、ほどける／ほどく、むける／むく、めく  
れる／めくる、焼ける／焼く、破れる／破る、割れる／割る、など

一方で、タイプ①の基本形(他動詞)を見てみると、

かぶさる／かぶす、くるまる／くるむ、刺さる／刺す、掴まる／掴む、つながる／  
つなぐ、はさまる／はさむ、ふさがる／ふさぐ、またがる／またぐ、など

のように、＜表面的な変形性＞というものは認められない；「花瓶に布をかぶす」「肉に串を刺す」「ガラスを木の板ではさむ」などは二格やヲ格で標示された対象に働きかけてはいるが、対象自体は変形しているとは言えない。

そうすると、他動詞uから自動詞erへの変換は、基本形に＜表面的な変形性＞を意味特徴として持つタイプ④のような動詞に起こったのであり、そのような意味特徴を持たないタイプ①の動詞はerの付加による自動詞への変換ができなかったのではないかと考えられる。

では、なぜarなのかと言うと、自・他動詞でペアを持つ動詞に限らず、arが自動詞化する接辞として、すでに認識・使用されていたからではないかと考えられる(下例参照)。

|            |   |          |       |              |                |
|------------|---|----------|-------|--------------|----------------|
| (他動詞)      |   |          | (自動詞) |              | (自動詞)          |
| 生む         | + | ar       | =     | 生まる          | → (下一段化) 生まれる  |
| <u>Umu</u> |   | 自動詞を作る接辞 |       | <u>Umaru</u> | <u>Umareru</u> |
| 語根         |   |          |       |              |                |

(島田 1979 : 598)

また、そもそも ar は、動詞「ある」(古語「あり」)の語幹であり、これは“現に存在している・持続している”といった<存在>の意味を表わす動詞である(大野 1978)。その意味で、ar はその起源から自然発生的な意味、すなわち自動詞的な意味を表わす形態素であったとも考えられるのである。

なお、タイプ② [-aru/-eru] では ar と er の両方が出現しているが、これについてはタイプ②a~c の各型において、以下のような方向性が考えられる。

a (①②連関ペア) : 例「つながる／つなぐ・つなげる」→図 3 参照

タイプ①他動詞「つなぐ」が古形と同形であり、基本形となっている。そこから、ar 自動詞「つながる」(①②自動詞)と er 他動詞「つなげる」(②他動詞)を派生した。

b (②専属ペア) : 例「決まる／決める」→図 4 参照

現行では使われていない古形「決む」が基本形となっており、そこから ar 自動詞「決まる」と er 他動詞「決める」が派生した。

c (②③連関ペア) : 例「休む・休まる／休める」→図 5 参照

タイプ③自動詞「休む」が古形と同形であり、基本形となっている。そこから、ar 自動詞「休まる」と er 他動詞「休める」が派生した。

タイプ②は、自動詞もしくは他動詞への派生の方向性は異なるものの、u を基に自動詞 ar と他動詞 er へ派生した点では共通していると考えられる。

なお、タイプ②の他動詞が er に固定されている理由としては、a~c の古形の多くは自他同形ではあったが、自動詞は四段活用、他動詞は下二段活用で使用されていたことから、他動詞は e、さらには下一段化した er と結びついていったからだと推察される(3.2.3.1 参照)。

最後に、タイプ②③連関ペアにおいて、③自動詞 [-u] があるのに、なぜもう一つの自動詞形であるタイプ②自動詞 [-aru] が生じたのかについて考えてみたい。

まず、ar の付加によって、自動詞 [-u] の語義とどのような違いが生じるのかについて見てみよう。

タイプ③自動詞：休む、縮む、絡む、すぼむ、など

タイプ②自動詞：休まる、縮まる、絡まる、すぼまる、など

これらの語義を比較してみると、ar が付加されたタイプ②自動詞の方が、付加されていないタイプ③自動詞よりも“その状態にあること”を強調している、もしくは“自然にそのような状態になった”[\*22] という意味をより明示していると言えそうである。これは、本研究で自動詞の意味として規定している<自発的自己完結的な変化>とも通ずる意味であると言え、その点で、ar の付加により「自動詞性」とも言うべき性質がより強調されていると考えられるのである。

しかし、だからといって、すべての自動詞 [-u] に ar が付加した訳ではなく、概念上は存在してもよさそうな動詞がない場合もある；たとえば、「歪む」などは<自然に歪んだ状態になった>という状況が考えられなくもないが、ar を付加した「\*歪まる」という動詞形は存在しない、など。また「しずむ」は、現行の共通語では「\*沈まる」は認められず、「静（鎮）まる／静（鎮）める」になると認められる（その場合「\*静（鎮）む」は認められなくなる）という現象も見られる。

このように、既存の自動詞 [-u] がある場合に、どのような場合に ar が付加され、どのような場合には付加されないのか、といったことも明らかにする必要があるだろう [\*23]。

#### 4. おわりに

本稿では、小池（2018）で提示された有対自他動詞の九つのタイプのうち、タイプ①～③に焦点を当てて考察した。これらのタイプは、自動詞終止形に [-aru] を取る点でタイプ①と②が共通し、他動詞終止形に [-eru] を取る点でタイプ②と③が共通する。そして、その内部を観察すると、同じタイプ①であっても、タイプ①にのみ所属する動詞ペアもあれば、タイプ②と関連を持つ動詞ペア（タイプ①②連関ペア）も存在しており、同様にタイプ③にも、タイプ③にのみ属す動詞ペアもあれば、タイプ②と関連を持つ動詞ペア（タイプ②③連関ペア）もあることがわかった。その結果、タイプ②は、タイプ②にのみ所属する動詞ペア・タイプ①②連関ペア・タイプ②③連関ペアの三層構造となっていることが明らかとなった。

本稿ではこれらのタイプ間における動詞形式の派生過程を、特に接辞 er と ar に焦点を当てて考察を進めたが、この er と ar については相互の接続性ということも問題になるであろう。たとえば、[ar+er] という承接パタンの場合、同じタイプ②(b)に属する「とまる／とめる」「決まる／決める」において、「とまる」は「とまれる tom-ar-er-u」が許容できるのに対し、「決まる」は「\*決まれる kim-ar-er-u」が許容できないなど。

また、タイプ②(b)「タイプ②専属ペア」は、他のタイプとの連関関係がない、いわばタイプ②の“典型”とも位置づけられる動詞ペアであるが、この②b 動詞の終止形 [-u]（古

形) が、どうしてタイプ①や③と異なり、自動詞なり他動詞なりとして存続せずに背景化されてしまったのかについても考えなければならないであろう。

さらに、本稿で対象としたタイプのうち、タイプ②と③は *er* が付加して他動詞になるタイプであったが、*er* が付加することによって自動詞になる場合もある (タイプ④と⑤。影山 1996 : 183 も参照)。

以上のように、残された問題は多く、これらについては稿を改めて考察していきたい。

## 注

- \*1 本稿では、自他の対立を “/” で分け、左を自動詞、右を他動詞とする。なお、表 1 に関する説明は、小池 (2018) も参照のこと。
- \*2 島田 (1979 : 598) も参照のこと。
- \*3 小池 (2018) で提示されている当該の派生過程に誤植が見つかったので、ここでは訂正したものを提示する。
- \*4 「合わさる／合わす・合わせる」については、さらに「合う」との関係もある点で複雑である。よって、本稿では考察の対象外とする。なお、小池 (2018) の注 8 も参照のこと。
- \*5 タイプ①②連関ペアに該当する動詞群を語史的に見ても、タイプ①の他動詞形が基本形になっていたと言えそうである。『日本語文法大辞典』(明治書院、2001)、『精選版 日本国語大辞典』(小学館、2008) を参照。
- \*6 注 3 同様、『精選版 日本国語大辞典』や『日本語文法大辞典』より。
- \*7 『日本語文法大辞典』より。
- \*8 坂梨 (2006) によれば、古語の四段活用他動詞 (例「読む」) が下一段活用の自動詞 (「読める」) を派生させた段階 (17 世紀後半) で<可能>の意味を有すものとして定着し、その変化が下二段活用自動詞のペアを持たなかった四段活用他動詞に影響 (類推) を与えることによって可能動詞が成立していったという ; 刈る→刈れる、置く→置ける。なお、可能動詞の成立に関しては、青木 (2010)、三宅 (2016) 等も参照のこと。
- \*9 筆者の内省に依れば、「かぶす・かぶせる」なら後者が優勢であり (車にシートを {かぶす<かぶせる})、「くるむ・くるめる」なら前者が優勢に感じられる (花瓶を布で {くるむ>くるめる})。一方、「繫ぐ・繫げる」は両者ともほぼ同義として使える (二本の紐を {繫ぐ=繫げる})。
- \*10 『精選版 日本国語大辞典』より。
- \*11 鈴木(1972)は「繫がる、ふさがる、くるまる」を例に、[-aru] 形自動詞の特徴は、他から働きかけを受けた (=受身的) 結果、現在その状態にある (=自動詞的) ことを示す点であると述べている。そして、このような特徴は [-eru] 形自動詞にも認められるとする ; 煮える、売れる、崩れるなど。

- \*12 タイプ③については、小池(2018)も参照のこと。
- \*13 「からまる／からめる」の古形「からむ」は四段他動詞の用例もある(『日本国語大辞典』より)。
- \*14 タイプ②専属ペアの古形(基本形)は下二段他動詞が多いが、一部に自他両用動詞と下二段自動詞が認められる。自他両用動詞の例としては「広ぐ」(→広がる／広げる)、「あらたむ」(→あらたまる／あらためる)、「をふ」(→終わる／終える)、「伝ふ」(→伝わる／伝える)などが挙げられる。また、下二段自動詞は「つとむ」(→つとめる／つとめる)がある。これらの古形は現代では使われない語形である点で、cの「タイプ②③連関ペア」とは異なる。
- \*15 坪井(2007)では、上二段動詞「起く」を例に、上二段活用から上一段活用への変化を説明している。
- \*16 四段活用から下二段活用への派生については、屋名池(2000)、青木(2010)を参照。
- \*17 影山(1996)は、「語彙概念構造 Lexical Conceptual Structure」の考え方より、-e-という派生接辞(本稿での *er* に該当する)によって、自動詞は「使役化」されて他動詞に、他動詞は「反使役化」されて自動詞になるとしている。
- \*18 *er* の挿入による動詞の可能形の成立は、本稿で述べた段階とは別の次元での成立と考えられるので、本稿では取り上げない。坂梨(2006)および本稿注8を参照。
- \*19 奥津(1967)では、*ar* を他動詞から自動詞を派生させる接辞として「自動化辞」と命名している。なお、奥津は、自動詞アガルを *ag-ar-u* と、他動詞アゲルを *age-ru* と分析し、自動詞の語幹 *ag* は他動詞の語幹末母音 *e* が脱落したものと見ている。
- \*20 影山(1996)では、*ar* は他動詞を「脱使役化」させて自動詞に変換する接辞とする。
- \*21 小池(2018)では、「売る、知る、つる」のような語にも＜表面的な変形性＞を認める説明がある。
- \*22 大野(1980: 116)には、「日本語のアルは、出現する意の系統に属する」とある。
- \*23 有対自他動詞の場合は、本稿で述べたようにタイプ①と②およびタイプ②③連関ペアに *ar* の付加が認められるが、無対自動詞には *ar* が付加しない(降る→\*降らる、動く→\*動かる、腐る→\*腐らる)。これは、これらの動詞にさらに *ar* を付加してまで自動詞性を高める必要がないと認識されたからだと思われる。

## 参考文献

- 青木博史(2010)『語形成から見た日本語文法史』、ひつじ書房  
安藤正次(1974)『国語学論集Ⅱ 安藤正次著作集2』、雄山閣  
大野 晋(1978)『日本語の文法を考える』、岩波書店  
(1980)『日本語の世界1 日本語の成立』、中央公論社  
奥津敬一郎(1967)「自動化・他動化および両極化転形—自・他動詞の対応—」『国語

- 学』70、国語学会（須賀・早津 1995 再録）
- 影山太郎（1996）『動詞意味論』、くろしお出版
- 加藤彰彦（1972）「動詞の変遷」『品詞別日本文法講座 動詞』、明治書院、pp.93-131
- 金谷武洋（2002）『日本語に主語はいらない』、講談社
- 小池 康（2018）「有対自他動詞の類型性から見た派生過程の考察」『日本語・日本文化研究』28、大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻、pp.1-23
- 坂梨隆三（2006）『近代語法研究』、武蔵野書院
- 島田昌彦（1979）『国語における自動詞と他動詞』、明治書院
- 須賀一好・早津恵美子（1995）『動詞の自他』、ひつじ書房
- 鈴木丹士郎（1972）「動詞の問題点」『品詞別日本文法講座 動詞』、明治書院、pp.133-180
- 坪井美樹（2007）『日本語活用体系の変遷 増訂版』、笠間書院
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味 I』、くろしお出版
- 西尾寅弥（1988）『現代語彙の研究』、明治書院
- 三宅俊浩（2016）「可能動詞の成立」『日本語の研究』12-2、日本語学会、pp.1-17
- 屋名池誠（2000）「書評：釘貫亨著『古代日本語の形態変化』」『国語学』201、国語学会、pp.116-124

～ 小池（2018）正誤表 ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

- p. 2 1行目の上に「(4) <ウ> 対 <アス>」を挿入。
- p.12 9行目 誤 パタン③ 正 タイプ③
- 23行目 誤 「パタン③」「パタン④」 正 「タイプ③」「タイプ④」
- p.13 図3内の用語 誤 パタン 正 タイプ
- p.16
- 7行目
- |   |           |             |   |            |
|---|-----------|-------------|---|------------|
| 誤 | 自動詞② [-i] | 自動詞③ [-ari] | / | 他動詞②③ [-e] |
| 正 | 自動詞③ [-i] | 自動詞② [-ari] | / | 他動詞②③ [-e] |
- 16行目
- |   |                                                |
|---|------------------------------------------------|
| 誤 | タイプ②自 [-i] → {タイプ②他＝タイプ③他 [-e]} → タイプ③自 [-ari] |
| 正 | タイプ③自 [-i] → {タイプ③他＝タイプ②他 [-e]} → タイプ②自 [-ari] |
- 20行目 誤 休める 正 休まる
- 21行目 誤 緩まる（緩め） 緩める（緩まり）
- 正 緩める（緩め） 緩まる（緩まり）
- p.23 参考資料2 表中
- |   |             |             |     |
|---|-------------|-------------|-----|
| 誤 | なくなる -unari | -usu        | なくす |
| 正 | なくなる -unari | <u>-usi</u> | なくす |